

柳のあをうらの小袖、わた十両に及んで候か。

此の大地の下に二つの地獄あり。一には熱地獄。炭<sup>炭</sup>起<sup>起</sup>すみををこし、野に火をつけ、  
 せうまうの火、鉄<sup>焼</sup>のゆのごとし。罪人のやくる事は、大火に紙をなげ、大火に木<sup>木</sup>屑<sup>屑</sup>  
 をなぐるがごとし。この地獄へは、やきとりと、火をかけてかたきをせめ、物をねたみ  
 て胸をこがす女人の墮つる地獄なり。二には寒地獄。此の地獄に八あり。涅槃經に云は  
 く「八種の寒氷地獄あり。所謂阿波々地獄・阿吒々地獄・阿羅々地獄・阿婆々地獄・  
 優鉢羅地獄・波頭摩地獄・拘物頭地獄・芬陀利地獄」云云。此の八大かん地獄は、或はかん  
 にせめられたるこえ、或は身のいろ等にて候。此の国のすはの御いけ、或は越中のたて  
 山のかへし、加賀の白山のれいのとりのはねをとぢられ、やもめをうなのすそのひゆる、  
 雉子<sup>雉子</sup>の雪にせめられたるをもてしろしめすべし。かん<sup>寒</sup>にせめられて、をとがいのわな  
 めく等を阿波々・阿吒々・阿羅々等と申す。かん<sup>寒</sup>にせめられて、身のくれないににたる  
 を紅蓮<sup>ぐれん</sup>・大紅蓮等と申すなり。いかなる人の此の地獄<sup>墮</sup>にをつるぞと申せば、此の世にて  
 人の衣服をぬすみとり、父母師匠等のさむげなるを<sup>寒</sup>見<sup>見</sup>まいらせて、我はあつくあた<sup>暖</sup>ゝか  
 にして昼夜をすごす人々の墮つる地獄なり。

六道の中に天道と申すは、其の所に生ずるより衣服と<sup>調</sup>のをりて生まるゝところなり。  
 人道の中にも商那和修<sup>しょうなわしゆ</sup>・鮮白比丘尼<sup>せんびやく</sup>等は悲母の胎内より衣服と<sup>調</sup>のをりて生まれ給へ  
 り。是はたうとき人々に衣服をあたへたるのみならず、父母・主君・三宝にきよくあつ  
 き衣をまいらせたる人なり。商那和修と申せし人は、裸形<sup>らぎょう</sup>なりし辟支仏<sup>びやくしぶつ</sup>に衣をまいら  
 せて、世々生々に衣服身に随ふ。橋曇弥<sup>きょうどんみ</sup>と申せし女人は、仏にきんばら衣をまいらせ  
 て、一切衆生<sup>きけんぶつ</sup>喜見仏となり給ふ。今法華經に衣をまいらせ給ふ女人あり。後生には八寒  
 地獄の苦をまぬかれさせ給ふのみならず、今生には大難<sup>私</sup>をはらひ、其の功德のあまりを  
 男女のきんだち、きぬにきぬをかさね、いろにいろをかさね給ふべし。穴賢<sup>あなかしこ</sup>穴賢。

十一月十八日

日 蓮 花 押

太田入道殿女房御返事